

執筆見本
2019.1.13

ジョン・アップダイクにおける「若い」

—フィクションのナショナリズム—

1行空け

中谷崇

(国際教養学系)

1行空け

はじめに

これまでアップダイク (John Updike) は、彼自身の生活と思考の場になっている 20 世紀アメリカ合衆国の中産階級の生活を繰り返し描いていることから、個人の作ったフィクションを越えて、合衆国そのものの姿を写し出している作家と捉えられる傾向が強かった¹。このようなアップダイク観は、彼の作品が、小説としてよりもむしろ文学形式のルポルタージュのように評価されることが多かったということでもある。

余白
19
ミリ

余白
19
ミリ

1行空け

第1節 □ ナショナリズム

見出しが2行にまたがる
場合、2行目の先頭位置
はここ。

1行空け

1.1. □ 言語的人工物としての「アメリカ」

それでは、アップダイクが小説の言葉によって represent (表象=代行) しようとする「アメリカ」とはどのような言語的人工物なのだろうか。そして、そのような言語的人工物を「作る」ためにはどのような「言葉」(社会的なマクロの視野で言えば「文学」「芸術」「文化」といった枠組み、アップダイク自身に即したミクロの視野で言えば、彼の「芸術」指向の表れとして時に高く評価され時には逆に批判される文体、特にその細密描写) が漸使されているのだろうか²。

1行空け

1.1.1. 短篇「鳩の羽根」

全角1
文字分
空ける

⑤
⑥) 孤立行の例

1

余白
23
ミリ

①

②

④

③

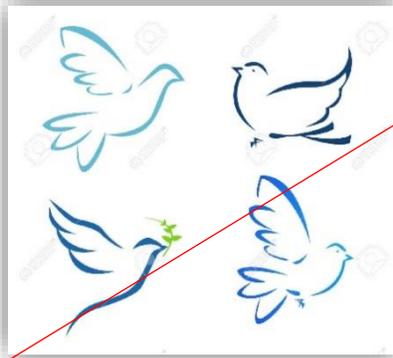
⑤

⑥

①

アップダイクの短篇として最も有名な作品の一つ「鳩の羽根」(“Pigeon Feathers”)は「死」と「芸術」の問題を直接扱っている(図1)³。

↑↓ 1行空け



出典やタイトルが2行にまたがる場合、2行目の先頭位置はここ。

出典 筆者作成

図1 □ 「老い/死」の表象化に関するアップダイクの問題意識：
表象化の手段としての言葉/文学/芸術

↑↓ 1行空け

⑧ まずこの作品のストーリーを簡単に確認しておく(表1、図2)。幾分少年時代のアップダイク自身を思わせる少年デイヴィッド(David)は、一家と一緒に田舎に引っ越して来て、他にやる事がないまま読書に耽っていたある時、H・G・ウェルズ(H.G. Wells)の本『世界大文化史』(*The Outline of History*)で、キリスト教はキリストの思想そのものとは無関係にでっち上げられてきたいかわしい体制だという記述を読み、死、正確に言えば虚無に対する恐怖に取り付かれる。

↑↓ 1行空け

□□ 恐ろしかったが、その恐怖は独特で、毎度のことだった。そのおかげで、彼は心の中でじつくりと耐えがたいほどに、ちょうど治りかけのあまりにも大きな傷のようにうずいていた形をなさぬ恐怖にきづかず

⑨

にすんだ (Updike, 1962, 日本語訳 p. 15)

↕ 1 行空け

社会体制の中で受け入れられている正式の教会の牧師も両親も彼の問いに対して満足な答えを出せず、彼らの宗教心が一種の体制順応的な思考停止に過ぎないという印象を彼は受ける。

↕ 1 行空け

⑦

表 1 「鳩の羽根」の登場人物

デイヴィッド	本物語の主人公。
エルシー	デイヴィッドの母。納屋に住み着いた鳩を撃ち殺すよう、デイヴィッドに頼む。
ジョージ	デイヴィッドの父。
デイヴィッドの母	死について考えるデイヴィッドにプラトンの〈洞窟の寓話〉を読むように勧める。



出典：筆者撮影

図 2 「鳩の羽根」の舞台

(ペンシルヴェニア州)

出典：筆者作成

↕ 1 行空け

第 2 節 ナショナリズムからの逸脱としての、「老人」の表象

↕ 1 行空け

2.1. アップダイク作品に特徴的な「死／衰弱」のテーマ

2.1.1. 「鳩の羽根」において

第 1 章第 1 節では「鳩の羽根」をデイヴィッドの「死／虚無」に対する恐怖の物語として検討してきた。しかし、虚無への恐怖とそれからの救いのストーリーだけに集約されるものとして読むには、何故作品に組み込まれなければならないのか説明できない細部がこの作品には多過ぎる。

↕ 1 行空け

2.1.2. 『プアハウス・フェア』(The Poorhouse Fair) 以降の作品

長編第 1 作『プアハウス・フェア』以降、アップダイクの作品では、一般的に、「若い国の若い文学」とされることの多いアメリカ文学としては例

外的なくらい頻繁に老人が重要な位置を占めている。

↑↓ 1 行空け

おわりに

アップダイクは、自国アメリカ合衆国の思考が、第一に、文明としてのヨーロッパに対するアンチテーゼとしての「自然」が肯定的な自己像を作る根拠として必要だったこと、そして第二に、文化的なトポスとして「自然」を崇拜の対象にしたロマン主義の時代としての19世紀に合衆国が近代国家として確立されたことといった非本質的な事情から来るナショナリスティックなフィクションに支配されていること、そしてその結果、自分にとって本来大切な存在である「文学」あるいは「芸術」の言葉が、同様に自分にとって重要な、「老人」や「不活発な男」などといった当たり前の存在を隠蔽する不自由さで暴力的な権力装置として、少なくとも合衆国では機能してしまっているという困った事態に直面した。

そこで、それに文学者として対処するため、新たな「言葉」、もう一つのフィクション」の提示を試み、それらによって「若い国」としての合衆国のナショナリスティックな自己像温存のために隠蔽されていた現実を復権するのである。

本文の最終行と注／参考文献のあいだは2行空け。

注

⑩ ← ⑪

⑩ →

⑫ ←

⑫ ↓

1 “fiction” という言葉はラテン語の動詞 “fingere” (作る) を語源としている。一方、“fact” (事実) という、日常用語のレベルでは対立概念と理解されている語の語源となっているラテン語の動詞 “facere” も、ほぼ同じ「作る」という意味である。このような、語源の上での両者の意味上の類似は、共に人間が作った言語的人工物であり、したがってそれは意識するとしなくて関わらず現実にバイアスをかけるが、しかし、それなしには人間は世界について思考できないというジレンマを抱えていることを示唆している。だからこそ我々は、狭い意味での「文学」の外にある「現実」の生活をいかに「フィクション」が規定しているかという問題について意識的になる必要があるのである。

2 “fiction” と “fact” を語源のレベルで結び付けている「作る」というアップダイクによって、繰り返し作品の中で扱っている重要なテーマである。このテーマについては、中

谷（1993）を参照されたい。

³ 初出は *The New Yorker* 37（August 19, 1961）。短篇集 *Pigeon Feathers and Other Stories*（New York: Knopf, 1962）に収録。

文末注と参考文献のあいだは2行空け。

- ⑬ 参考文献一覧
- ⑥ [書籍・論文]
- Chase, Richard (1957) *American Novel and Its Tradition*, Baltimore and London: The Johns Hopkins U. P.
- ⑭ Updike, John (1962) "Pigeon Feathers," *Pigeon Feathers and Other Stories*, New York: Knopf (岩本巖訳 (1995) 『ジョン・アップダイク 自選短編集』 (東京: 新潮社) ⑮
- Wells, H. G. (1920) *The Outline of History*, London: George Newne.
- 大江健三郎 (1985) 『小説のたくらみ、知の楽しみ』 東京: 新潮社.
- 中谷崇 (1993) 「ジョン・アップダイクの『プアハウス・フェア』における反・崩壊への教育」『女子美術大学紀要』第24号.
- (1996) 「アップダイクの『帰ってきたウサギ』とペンシルヴェニア」渡辺利雄編『読み直すアメリカ文学』東京: 研究社.
- 宮本陽吉 (1977) 『アメリカ小説を読む』 東京: 集英社
- ⇕ 1行空け
- ⑭ [Web 情報]
- Academy of Achievement Homepage "John Updike" <<http://www.achievement.org/achiever/john-updike/>> (最終閲覧日: 2016年11月14日)

<執筆見本終わり>

執筆見本において、番号を付した点について

- ① 用紙サイズはA5とし、1頁当たり33字×28行とします。
余白の数値はMS Word 2016の場合。それ以前のver.や、異なるアプリの場合、多少前後するかもしれませんので、適宜調整してください。
- ② 論文タイトルはMS 明朝・太字・14pt（副題は12pt）で入力、中央揃えにしてください。
氏名はMS 明朝・太字・14ptで入力、右揃え。
- ③ 氏名の下に、所属学系を丸カッコで括って入力、右揃えにしてください（使用フォントは④-1）に同じ。
- ④ フォントは次のとおりとします。
 - 1) 本文、図表の出典、参考文献一覧中の文字：
 - 漢字、ひらがな、カタカナ：
既定のフォント・既定のpt数（MS Word 2016ではMS 明朝・10.5pt）。※1
 - アルファベット、数字：
Times New Roman・既定のpt数。半角文字を用いること。※2
 - 2) 本文の節・項などの見出し、図表タイトル、文末の「注」（後注方式を選択し場合）、「参考文献一覧」およびその中のカテゴリーの見出し：
MS ゴシック体・既定のpt数。

3) 注：

フォントは1)に同じ、ただし文字サイズは9ptとします。行間は既定値にしてください(本文部分よりも狭くなるはずです)。

※1 そうしなければ、頁設定を33字×28行としても、そのとおりにはならないはずです。

※2 注番号(上付き4分の1角)については、この限りではありません。

- ⑤
- 1) 節は「第1節」「第2節」、項は「1.1」「1.2」…、「2.1」「2.2」…の表記に統一します。項より下のサブカテゴリ番号の振り方については著者の自由に委ねます。
 - 2) 節・項の番号と、それぞれの見出しの先頭文字のあいだに全角1文字分のスペースを入れてください。
 - 3) 節・項の番号・見出しは左揃えとします。
 - 4) 節の上下は1行空けとしてください。また、節と項、および項と項以下のあいだも1行空けとします。
それぞれの見出しが頁の上端/下端にくる場合も、上記のとおり、行を空けておいてください。
 - 5) 項以下の同一セクションのあいだは、1行空けにしても、詰めても構いません。
 - 6) 上記の指示どおりに行空けをしたとき、孤立行が生ずることがあるかもしれませんが、論文の分量カウントの都合上、そのままにしておいてください。組版・印刷時に適宜処置します。
図表タイトル(以下⑦)や長文の引用(以下⑨)も同上。
- ⑥
- 1) カッコ類、コンマ、ピリオドなどの記号は全角(既定フォント)、半角(Times New Roman)のどちらを使っても構いません。

ただし、日本語の記述中ではとくに理由がないかぎり、全角の記号の使用を推奨いたします（ただし、注番号に付く丸カッコ、例えば「¹⁾」についてはこの限りではありません）。

2) 半角記号を使う場合、その前後に適宜スペースを入れてください。

- 次の半角記号は、直後に半角スペースを入れる：
コンマ、ピリオド、コロ、セミコロン、疑問符、感嘆符、閉じカッコ類、閉じ引用符。
- 開きカッコ類、開き引用符、単位の直前には半角スペースを入れる。

<例>

○ 大学(院)生 × 大学(院)生
○ p.138 × p.138
○ 11% × 11%

3) 全角記号の前後にはスペースの挿入は不要です（ふつうは自動的にスペースが挿入されるはずです）。よって、半角記号の直前・直後に全角記号が来る場合、2)は不要です。

- ⑦ 1) 図表の上下は1行空けにしてください。
- 2) 図の場合、上から図→出典→図タイトルの順にレイアウト。
表の場合、上から表タイトル→表→出典の順にレイアウト。
- 3) 図表および図表タイトルは中央揃え、出典は左揃えとします。
- 4) 小さい図表はこのように横に並べても構いません。しかし、図表の横（左/右）に本文を入力することは不可とします（冊子の版型が小さいため（A5版）、文章が読みにくくなるため）。

↑

次頁に例を示します。

<例>

NG⇒



- ⑧ 1) 図と写真は「図」、表は「表」という呼称で統一します。
2) 図および表ごとに論文全体での通し番号を振ってください。
 <例>○ 図1、図2…、表1、表2
 × 図1.1、図2.1…のように、節ごとに番号を振る。
3) 図表番号と、図表タイトルの先頭文字とのあいだに全角1文字分のスペースを挿入してください。
- ⑨ 長文を引用する場合、上下を1行ずつ空け、全角2字下げ（引用文の段落冒頭は3字下げも可）で入力してください。
- ⑩ 注は後注、脚注のどちらにしても構いません。
- ⑪ 既定の設定では本文と後注のあいだに（そして、後注が2頁以上にまたがる場合、2頁目以降の冒頭にも）境界線が引かれるはずですが。この執筆見本では消してありますが、消し方がわからない場合、そのままにしておいても構いません。
なお、脚注方式にした場合、境界線を消す必要はありません。
- ⑫ 引用符が正しい向きになっているかどうか注意してください。

- ⑬ 1) 論文末に参考文献一覧を付さない方法と、付す方法との二通りありますが、どちらの方式を採っても構いません。
- 2) 一覧には原則として、本文中で引用ないし言及した文献や、図表の出典のみを載せてください。
- ただし、執筆者の所属する研究分野において、参照のした文献も載せることが標準的である場合や、その他の理由がある場合には例外として許可します。「原稿提出用紙」の該当の欄にその旨記入してください。
- 3) 本文ないし注、および参考文献一覧への書誌情報の表記については、執筆者の所属する研究分野において標準的な表記法にしたがってください。
- ＜表記法の一例＞
MLA スタイル、APA スタイル、シカゴスタイルなど
- ⑭ 1) 参考文献一覧では行間が本文部分と同じになるようにしてください。
- 2) 参考文献一覧において、文献をカテゴリー別に分けて記載する場合、執筆者の所属する研究分野での標準にしたがってカテゴリー分けしてください。
- 3) 文献の記載順についても、執筆者の所属する研究分野での標準にしたがってください。
- ⑮ 1) ひとつの文献の書誌情報が2行以上にまたがる場合、2行以下は全角2文字分下げてください。
- 2) 同一カテゴリー内の文献と文献のあいだは行を空けず、カテゴリー間は1行空けにしてください。